

【参考資料】患者プログラム参加者インタビュー①

参加者：Aさん インタビュー実施日：2022/12/14

現在のお仕事

いまは週2回、小学校の看護師として働いています。医療ケアが必要なお子さんが2人いて、あとは、特別支援学級の発達障害児の方などの授業同行としてフォローをしています。貧血が常にある状態で、月に1回輸血をしていて、階段上ったあとにすぐに声かけられると、息切れでちょっとうまく喋られないですね。もう少し働けたかなあと色々葛藤する時期はあったんですけど、1日身体休めてもう一回踏ん張ってみたい生活が、今の体調には割に合っているかなとは思っていますね。

りぼら参加のきっかけ

りぼらに参加する2か月前に当時の会社を退職をしています。前の会社では、がんの告知を受けてから通常業務をさせていただいていたんですけど、ただの胃腸炎で体調を崩したときに、その受診結果を持って出勤すると、その日からちょっと休んでくれと言われて、戻れなかったんですね。もうだめだな、復職できないなと思って、退職して失意のどん底みたいな形のなかで、JCDAの30分無料キャリアカウンセリングを見つけて、そこが最初の扉でした。(そこで話してみても)なんかすっきりしましたね。当時は、コロナが蔓延していて、私いまこういう状況なんだよ、ということを友人とかに全く言えなかったんですね。私は(前の職場から)不当な扱いを受けていると思ったから、怒りと憤りが強すぎて。結構引きこもっていて、転職活動等は全くしていませんでした。その時に、(りぼらに)参加しませんかというお誘いを受けて。

りぼらに参加してみて

がんのり患者は自分だけじゃないんだな、って率直に思いました。自分ががん患者であること受け入れざるを得ない状況と私ばかりじゃないんだという安堵感とで、なんだかそういう緊張はありましたよね。がん患者なんだね、私たちと、独りよがりの世界から変わったという感じ。

私のお話を泣いてくれる人がいたことにびっくりしました。自分では泣けないけど、相手が泣いてくれると、やっぱり嬉しかったですね。励ましてもらったり、「それは間違っていないですよ」とか「そんな境遇のなか頑張っているんですね」という言葉をもらうと、ああそうなんだ良かったと正直に思えた。

あと他者からの視点が有難かったです。色んなワークをするなかで、「私のことがどう見えるか」という他者からの視点をもらうときに、ハッとしたんですね。そういう(忘れかけていた)自分を持ち合わせて生きてきたんだなって。これから私なんでもできるよなとプラスの気持ちを持ってたんですね。

【参考資料】患者プログラム参加者インタビュー①

参加者：Aさん インタビュー実施日：2022/12/14

りぼらを終えた自身の変化

どんな自分でもいいんだってことです。(りぼらは)自己肯定感を思い出させてくれる場でしたね。がんになっても、どんな怒りや憤りを感じても、認めてあげたいということ。それは結構大きな救いだったんですね。告知から3年たった今でも、病気になる前の自分を思うと、情けないなって思うことはありますが、こんな自分でもいいんだってのがけっこう今の自分を支えています。

りぼらのキャリアカウンセラーから、最初と最後で全然表情が違うと言っていたんだですね。怒りや悲しみ、理不尽な事を手放すことが大きいと思います。それらを人に語ったり、言語化して、俯瞰できたり。そうすると、あー進んでるなと思えます。客観視できている自分が誇らしいですね。

あと仕事との向き合い方のアドバイスも、今に繋がってることで得られた意識ですね。りぼらを終えてから、今の仕事に就く前に、登録制の派遣の仕事をしていて、結構病んじやったんですね。それで、りぼらで携わってくださったキャリアカウンセラーに相談したら、「何をしてるときが一番わくわくしますか？」という問いかけがあって、「やっぱり有難うございましたと感謝される時ですかね」と答えると、「それはAさんが看護師だから安心したということだろうから、凄く重要なお仕事ですよ」と仰ってくださって。自分の専門性が活かされたときにああ良かったとか、この仕事のここの部分が楽しいからやってるんだと、そこに集中しようとちょっと視野を変えたら、楽になったんですよ。今もしんどいなと思ったら、これが看護の仕事なんだ、間違いないと思って、そこに集中して仕事しようと思ってます。

いま大事にしていること

朝起きて目が覚めることは奇跡なので、日常を本当に幸せに思います。今後ちょっと大きな治療に踏み込まなければならぬので3月末で(今の小学校の仕事を)退職をするのですけれど、この学校で働けたことに感謝してるし、医療ケアのベースを築いていくのは全て子供たちのためなので、今後の課題を報告書にして上にあげていくにはどうしらいいかを先輩に相談しています。そうやって自分なりに行動して、紙に残して、去っていく身だけど、感謝の気持ちを持って生きている生き方ができたのは良かったなと思っています。

以上